

「ぬか床」はね、おじいさん（義父）が

桶（味噌樽）へ漬けただよね。嫁に来た時、おじいさんが「おれ、指輪の大事なのをね、ぬか床へ落としちゃったにね、探してくれりよ」って言って。

「まだ出てこん、まだ出てこん」思って探してたけどえーかんやっただけえが、

「何にもじいちゃん、出てこんよ」って言ったら

「はあ、そのくらいでええわ。ぬか床はね、そのくらい手を入れりゃあうまくなるってそういうこった」おじいさんが言ったっけ。

81才女性

女性が結婚したのは昭和36年、23才でした。島田市金谷町から稲荷町へ嫁いだ女性に家事を指南したのは義父でした。厳しくも優しい義父は、ぬか床に指輪を落としてはいけないけれど、そう嫁である女性に言って毎日よくかき混ぜる事を教えてくれたそうです。そのぬか床の容器は、大きな桶からプラスチックに変わりましたが、ぬか床はぬかをつぎ足しながら何十年、今でも変わらぬ味だそうです。